

## 「サマリア人の村」

ルカの福音書 9:51~55

### はじめに

「神の国の福音」とは、私たちが今生かされている時間、今日に関する福音ではありません。それは「将来 (エレミヤ 29:11)」ヘブル語でアハリート(אֲחִירָת)すなわち終わりの日、世の終わり、後の時代へと変わって行くその最期について知らせているものです。茫漠、混沌とした今の時代が終わり、神の御子メシアであられるイエシュアが王の王、主の主としてイスラエルおよび全世界を統べ治められるために、再びこの地に来られる時とは一体どのようなものか、何が起こるのかということが、字義通りあるいは「型」たえによって預言され、言い伝えられ、書き記されているものです。イエシュアは初めからこの「神の国の福音」だけを宣べ伝えておられました。そして聖書全体はこのイエシュアを指し示す書物ですから、聖書の内容は本来、すべて「神の国の福音」として受け取らなければならないのです。つまりすべて終わりの日、世の終わりに起こる、成就する神のご計画を思いめぐらせながら読まなければならないのです。そうすることによって、今を生かされ、今日聖書を読み解き、それを聞いて受け入れる人々の願い、求め、祈りがみな「御国が来ますように。」また「主イエシュアよ、来てください。」というものとなり、「神の国」を第一に求める者とならせ、主とともに住むことをただ一つの願いとする者へと至らせるのです。今日も、「神の国」が来る、イエシュアが来られる世の終わりの日を思いながら、主を待ち望みながら聖書を読み進んでまいりましょう。

### 1. 天に上げられる日

ルカの福音書【新改訳 2017】

9:51 さて、天に上げられる日が近づいて来たころのことであった。イエスは御顔をエルサレムに向け、毅然として進んで行かれた。

いきなりですがここは重要です。この記述を決して単なる前置き、ただの状況説明として聞き流してはなりません。イエシュアの視点、御心すなわち神のご計画を知り、ここから始まる内容が指し示している結論とも言えるものが言い表されているからです。まずここには一つのパラレリズム（対句法）つまり一つの物事を別の言い方で表現し、意味を補いながら繰り返し強調されているものがあります。それはイエシュアが「天に上げられる」ことと「御顔をエルサレムに向け」られる、という二つの出来事、行為がそれぞれ終わりの日に起こる神のご計画を指し示し、この両者が「近づいて」いる関係にある、つまりこの二つがほぼ同じ時に起こる、成就するということが示されているのです。ではこのイエシュアについての二つの記述にはそれぞれどのような神のご計画が示されているのでしょうか。

まず「天に上げられる」ことについて。これが指し示す神のご計画は単純明快に「携挙」と呼ばれる以下の預言の成就です。

テサロニケ人への手紙 I 【新改訳 2017】

4:16 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、

4:17 それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

コリント人への手紙 I 【新改訳 2017】

15:51 聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな眠るわけではありませんが、みな変えられます。

15:52 終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちに変えられます。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。

15:53 この朽ちるべきものが、朽ちないものを必ず着ることになり、この死ぬべきものが、死なないものを必ず着ることになるからです。

「天に上げられる」ことは、イエシュアの十字架の死からの復活と昇天を指し示しているとも言えますが、それは上記の預言を指し示す「型」であり、イエシュアはこの携拳における人々の復活の「初穂」となられたのです。こう記されています。

コリント人への手紙 I 【新改訳 2017】

15:20 しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。

15:23 しかし、それぞれに順序があります。まず初穂であるキリスト、次にその来臨のときにキリストに属している人たちです。

このように、聖書は、イエシュアは常に終わりの日を、最終的な神のご計画を指し示していることを覚えましょう。ただし、この解釈には一つ注意点があります。世の終わり、最終的といっても、まだまだ遠い未来の話だとは思わないようにしてください。上記にあるように、私たちは「眠った者」すなわち「死者」となるならば時間の感覚、概念から解き放たれます。皆さんも朝寝坊して遅刻した経験があるでしょう。人は眠っている間、時を忘れます。それと同じように、死者はその復活まで何日、何年、何百年眠っているような長さを感じることがありません。つまり、あなたがもしこの後すぐ死ぬならば、携拳によってよみがえらされる日は、あなたにとってはまるで今日のように感じるのです。私たちは自分がいつ死ぬのかわかりません。ですからあなたにとっての携拳はもしかすると今日かもしれず、「その日、その時がいつなのかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。父だけが知っておられます（マルコ 13:32）。」と言われたイエシュアの御言葉は真実であり、信すべきものなのです。ですから私たちはいつでも自分の死、眠る時を、そして復活の携拳の日が近いこと、すぐにでも起こり得る事実として覚えている必要があるのです。

## 2. 御顔をエルサレムに向け

では次に「御顔をエルサレムに向け」られたということについてですが、この「顔を～に向ける」という表現は旧約聖書にも多く用いられているもので、つまりヘブル語的な表現なのです。この福音書の筆者ルカはユダヤ人ではなくローマ人すなわち異邦人であるというのが定説ですが、メシアニックジューの神学博士アーノルド・フルクテンバウム博士は、このようなルカの文章表現や、何よりエルサレムを重要視する姿勢が顕著であることを見て、彼がユダヤ人であった可能性を挙げておられます。いずれにせよこの「顔を～に向ける」という表現は旧約聖書にも多く見られ、特にエゼキエル書にそれが集中しています(エゼキエル 6:2、13:17、21:2、25:2、35:2、38:2)。そしてその中で「顔をエルサレムに向け」という同じ意味で用いられているのが以下のものです。

エゼキエル書【新改訳 2017】

6:2 「人の子よ。イスラエルの山々に顔を向け、それらに向かって預言せよ。

6:3 『イスラエルの山々よ、【神】である主のことばを聞け。【神】である主は、山や丘、谷川や谷に向かってこう言われる。見よ。わたしは剣をあなたがたの上にもたらし、あなたがたの高き所を滅ぼす。

6:4 あなたがたの祭壇は荒らされ、あなたがたの香の台は破壊される。わたしはあなたがたの中の刺し殺された者どもを、あなたがたの偶像の前に投げ捨てる。

6:5 わたしはイスラエルの民の屍を彼らの偶像の前に置き、あなたがたの骨をあなたがたの祭壇の周りに散らす。

6:6 あなたがたがどこに住もうとも、町々は廃墟となり、高き所は荒らされる。こうして、あなたがたの祭壇は廃墟となり、罰を受ける。あなたがたの偶像は破壊されて消滅し、あなたがたの香の台は切り倒され、あなたがたのわざは消し去られ、

6:7 刺し殺された者があなたがたのただ中に横たわる。そのときあなたがたは、わたしが【主】であることを知る。

6:8 しかし、わたしは、あなたがたのうちのある者を残しておく。あなたがたが諸国に追い散らされるとき、剣から逃れる者たちを国々の中に残す。

エルサレム、イェルーシャーライム(יְרוּשָׁלַיִם)は一つの都でありながらヘブル語としては複数形、双数形で記され、シオンの山、モリヤの山、主の家の山などとも呼ばれ、地理的にも山の上に建てられた街です。つまり「イスラエルの山々」とはエルサレムのことなのです。この都に「人の子よ…顔を向け」と言って始まる上記の預言は、直接的には B.C.586 年にバビロンによって滅ぼされた南ユダ王国に対するものとして成就しましたが、これもまた「型」であり、究極的にはやはり終わりの日についてのそれであり、その時エルサレムにおいて起こる出来事を指しています。イエシュアは「御顔をエルサレムに向け」られることによって上記のエゼキエルの預言を指し示した上で、南ユダに起こったこれと同じようなことが終わりの日に再び起こることを指し示されたのです。これをアップデートまたは補足するかのように、さらにダニエル書の預言とも結びつけてイエシュアご自身がこう解き明かし、明言しておられます。

マタイの福音書【新改訳 2017】

24:15 それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす忌まわしいもの』が聖なる所に立っているのを見たら——読者はよく理解せよ——

24:16 ユダヤにいる人たちは山へ逃げなさい。

24:21 そのときには、世の始まりから今に至るまでなかったような、また今後も決してないような、大きな苦難があるからです。

24:22 もしその日数が少なくされないなら、一人も救われられないでしょう。しかし、選ばれた者たちのために、その日数は少なくされます。

「聖なる所」とはエルサレムの神殿であり、そこに「荒らす忌まわしいもの」と呼ばれる黙示録の獣、反キリストが現れます。その時エルサレムは獣の神殿となり、偶像の祭壇となります。それは大患難時代と呼ばれる「世の始まりから今に至るまでなかったような、また今後も決してないような、大きな苦難」の日であり、世の終わりにはエルサレムにおいてこのようなことが起こるとイエシュアは予言されました。

しかし、そのような中にも救われるべき「選ばれた者たち」がいることが示されています、先のエゼキエルの預言でも「しかし、わたしは、あなたがたのうちのある者を残しておく。あなたがたが諸国に追い散らされるとき、剣から逃れる者たちを国々の中に残す。」と預言されており、これは「イスラエルの残りの者」とも呼ばれ、終わりの日にはイスラエルの中にこのような存在が起こされる、残されることが約束されています。終わりの日にエルサレムに起こる大患難、しかしイスラエルの残りの者たちは生き残り、救われるという事実が、神のご計画が「イエスは御顔をエルサレムに向け、毅然として進んで行かれた。」という記述の中には秘められているのです。つまりこの事実と先に述べた「天に上げられる日」に指し示された「携拳」とは「近づいて」いる、近い関係にあり、まさにパラレリズム、対をなして、ほぼ同じ時に連動して、連鎖的に起こる出来事である、ということがこの記述には奥義として秘められているのです。携拳によって救われる、復活する人々（私たち）、そして大患難のイスラエルの残りの者たち、イエシュアの建てられる「神の国」の民となるべく選ばれている存在を覚えつつ、次の出来事を見てください。

## 2. サマリア人

ルカの福音書【新改訳 2017】

9:52 そして、ご自分の前に使いを送り出された。彼らは行ってサマリア人の村に入り、イエスのために備えをした。

9:53 しかし、イエスが御顔をエルサレムに向けて進んでおられたので、サマリア人はイエスを受け入れなかった。

9:54 弟子のヤコブとヨハネが、これを見て言った。「主よ。私たちが天から火を下して、彼らを焼き滅ぼしましょうか。」

9:55 しかし、イエスは振り向いて二人を叱られた。

以前の私はこの内容を説明するために、ユダヤ人とサマリア人の関係の悪さとその理由、歴史的背景について、他の福音書や旧約聖書の史実などを引用して語っていました。しかし先の記述が携拳とイスラエ

ルの残りの者を指し示す神のご計画の「型」であるならば、ここでその説明は重要ではなく、かえって「神の国の福音」を理解する上で妨げとなってしまいます。事実「すべてのことを初めから綿密に調べ…順序立てて書いて（ルカ 1:3）」いるはずの筆者ルカ自身が、このサマリア人についての説明を明らかに省いています。ですから私もそれを省略し、ここに秘められている「神の国の奥義」のみを語ります。

ここにも先ほどと同じ「イエスが御顔をエルサレムに向けて」という表現が用いられています。ですからここにも終わりの日の大患難におけるイスラエルの残りの者についての言及があるということです。そしてこのサマリア人こそがイスラエルの残りの者たちの「型」となっているのです。そう聞くと疑問に思われるかもしれませんが。なぜならイスラエルの残りの者とはイエシュアをメシアとして信じ受け入れる者たちだからです。しかしここでサマリア人が受け入れなかったのはイエシュアそのものではなく、「イエスが御顔をエルサレムに向けて」いるという事実です。イエシュアのこの行為は、バビロンによるエルサレムの滅亡の預言から、終わりの日の反キリストによる大患難を指し示していると述べました。それを受け入れない人々、つまりその影響を受けない、害を受けない者たちの存在がこのサマリア人には表されているのです。

またここで弟子のヤコブとヨハネが言っている内容は、Ⅱ列王記 1:9～12 で預言者エリヤが行った、サマリアの王アハズヤの兵士を天からの火で焼き殺したという事実に基づいています。これもまた「型」であり、それは黙示録の以下の預言を指し示しています。

#### ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

11:3 わたしがそれを許すので、わたしの二人の証人は、粗布をまとって千二百六十日間、預言する。」

11:5 もしだれかが彼らに害を加えようとするなら、彼らの口から火が出て、敵を焼き尽くす。もしだれかが彼らに害を加えようとするなら、必ずこのように殺される。

終わりの日には「二人の証人」再びエリヤがモーセとともに遣わされて地上で数々の奇蹟を行い、敵対する者を容赦なく火で焼き尽くします。しかしイスラエルの残りの者たちは彼らに殺されることはありません。その事実がサマリア人を焼こう言ったヤコブとヨハネに対し「イエスは振り向いて二人を叱られた」つまり彼らに危害を加えてはならないと戒められた、という行為には表されているのです。このように、この出来事におけるサマリア人に「型」として表されたイスラエルの残りの者たちは、大患難の中にあっても、いかなるものからも害を受けることはありません。このように預言されています。

#### ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

7:2 また私は、もう一人の御使いが、日の昇る方から、生ける神の印を持って上って来るのを見た。彼は、地にも海にも害を加えることを許された四人の御使いたちに、大声で叫んだ。

7:3 「私たちが神のしもべたちの額に印を押してしまうまで、地にも海にも木にも害を加えてはいけな

い。」  
7:4 私は、印を押された者たちの数を耳にした。それは十四万四千人で、イスラエルの子らのあらゆる部族の者が印を押されていた。

9:4 そして彼らは、地の草やどんな青草、どんな木にも害を加えてはならないが、額に神の印を持たない人たちには加えてよい、と言い渡された。

「額に神の印」を押された「神のしもべたち」、これが終わりの日におけるイスラエルの残りの者たちの呼び名であり、その数は「十四万四千人で、イスラエルの子らのあらゆる部族の者」であると記されています。彼らは未曾有の大患難の中にあってもその被害に遭うことなく、最後まで「守られる」のです。この「守る、守られる」という意味のヘブル語はシャーマル(שמר)と言いますが、これがサマリア(שמרון)という名前の中に秘められていることは、決して偶然ではありません。しかし神のご計画は、十四万四千人のイスラエルの残りの者のいのちを守ること、ただ生かすこと、神の印を押すことがその目的、完了、完成ではありません。彼らが「神の国」において与えられたイスラエルの土地を「守り」、そして主の定めと掟とを「守る」者とならせることこそがそれなのです。

#### エゼキエル【新改訳 2017】

11:17 それゆえ言え。『【神】である主はこう言われる。わたしはあなたがたを諸国の民の中から集め、あなたがたが散らされていた国々からあなたがたを呼び寄せ、あなたがたにイスラエルの地を与える。』

11:19 わたしは彼らに一つの心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を与える。わたしは彼らのからだから石の心を取り除き、彼らに肉の心を与える。

11:20 こうして、彼らはわたしの掟に従って歩み、わたしの定めを守り行う。彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。

このような意味と神のご計画とが今日の箇所のサマリア人の存在には表されている、奥義として秘められているのです。この真理は、シャーマルの最初の言及とも見事に合致します。

#### 創世記【新改訳 2017】

2:15 神である【主】は人を連れて来て、エデンの園に置き、そこを耕させ、また守らせた。

「神の国」におけるエルサレムは、この「エデンの園」の回復です。そこに連れて来られ、置かれ、仕えさせ、そしてシャーマル「守らせ」る。私たちが祈り求め、待ち望んでいる御国「神の国」のために、彼らイスラエルの残りの者は決して軽んじてはならない、重要かつ必須の存在なのです。「神の国」を覚えるならば、そのために祈るならば、彼らイスラエルのためにも私たちは祈っていかなければならないのです。それが主がかつてアブラハムに約束された、アブラハムとその子孫を祝福する者は祝福される世界、イスラエルによってすべての国々が祝福される世界としての「神の国」メシア王国、千年王国なのです。このように、「神の国の福音」として聖書を読み解き、終わりの日を覚え、イエシュアの御顔と同じように、私たちの顔も思いもそこに向けてまいりましょう。